

## 編集室から

最近、季節の移ろう中ほどに位置する春と秋が短くなっているような気がしています。

今年も夏の暑さが残暑として続いていると思いきや、急に冷え込みだし早くも初冬となりました。地球温暖化というと、なにやら温和な印象を受ける方も居られるようですが、ところがどっこい真実は気候激動化なのではないかとネーミングの危うさと人々の危機感との関係に想いを致しています。

今月の表紙写真は昨年、60年に一度の遷宮を終えた出雲大社をお参りに伺った際のもので、あれから早くも1年が経ったかと思うと、光陰矢の如くで、その間の月日に一体何を成したのか、振り返ると身体だけでなく、心にも寒い風を感じます。

地球温暖化という真剣味に欠けた名称の気候激動化の危機が叫ばれてから一体何年の歳月が流れていることでしょうか。この間、人間は何を為し得、何を為し得なかったのでしょうか。人類の英知だけではどうにもならない事態となって現れるか、それとも平穏な地球であり続けるか、数十年後に答えが提示されることでしょうか。

現代社会では、IT機器を始め実に様々な機器・道具によって暮らしが支えられています。それに伴い人々の欲求も高度化しています。

ですが本来、動物である人間は食べ物が無くては生きてゆけません。また、その食べ物も動物性のもものだけでは健康になることができません。つまり、植物を育み糧とする農業こそが我々の生命維持に絶対欠かせない基幹産業である事実は、精神が肉体を必要とする限り、どれほど文明が進化しようとも変わりようが無い基本中の基本のことのはずです。

この事実を忘れて呆ける事の無いよう、くれぐれも注意したいものです(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆  
していただいている川島さん  
が「能登の夜市」の姉妹店を  
開店されました。

上京された際、ご利用になっ  
てみてください。

もちろん、川島さんご自身も  
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン  
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術  
者を育てることを目的に発行を始めました。  
その後、計画という仕事の内容や、普段、  
計画マンがどのようなことを考えているのか  
などに触れて、少しでも業界を知っていただ  
ければと考えて編集しています。

2014/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2014/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 霜 月



60年に一度の遷宮を終えた  
出雲大社にて(昨年撮影)

by hama

## 濱のつばやき 『老後』

人生には三つの「さか」があるという。

上り坂、下り坂。そして第三の「さか」は、「まさか」。

愛車のオイル交換のために車両整備工場で待っている時、一冊の週刊誌に目が止まった。関係各位には恐縮だが、低レベルな記事が多い週刊誌には、ほとんど興味が無い。

ところが、その週刊誌の表紙には、金色の背景にこんな文字が黒々と刷られていた。

曰く、「『老後破産』一百万人の衝撃」

ページをめくると、それは六十五歳以上の十六人に一人が直面するらしい。「長生きなんか、するんじゃないかった」というサブタイトルも付けられている。

老後破産者への取材で構成された第一部では、七十過ぎて、食つモノに困るとは……として、普通のサラリーマンだった人が定年から十年ほどで暮らしに行き詰まってしまった事例が数件紹介されている。

どうやら、それらは九月二十八日に放映されたNHKスペシャル「老人漂流社会『老後破産』の現実」という番組をベースにしているらしい。この辺りはいかにも週刊誌らしい。

第二部は、破産する人としらない人の分かれ目を、大学教授と生活困窮者の支援活動を行っているNPO代表との対談の形で紹介していた。

ここでは生活保護を受けようとする際に障害となる諸々の課題と、それを引き起こす制度上の問題点が指摘されている。

ざつと読むと、どうやら余りにも低い給料・労働環境で働かされている若者世代を子供に持つ親世代が、共に生活困窮者となる例が急増しているらしい。

元来、三面記事には興味が無い。人生は人それぞれである。他人の事情が即、自分の事情になることはほとんど無い。この辺りまでは、そんな気分では他人事だった。

第三部は、タイプ別に老後破産をまぬかれるのか、いつ頃破産してしまうのか、ファイナンシャルプランナーによる独自の試算で予測をグラフ化していた。

この手の試算には、多くの仮定が存在する。今回の場合は、現役のときの年収が六百万。退職金は、千八百万。男性の平均寿命は八十歳。妻は二歳年下。物価上昇率は二パーセント。となっている。

さらに、タイプは、持ち家かどうか・夫婦世帯か単身か・生活水準を下げられるかどうか、で五つに分けられている。

このうち、持ち家・夫婦世帯・生活水準を下げられないというaのパターンだけがグラフになっている。それによると、現在五十歳のサラリーマンでは七十一歳で、五十五歳だと七十七歳で、六十歳だと七十九歳で、七十歳だと七十七歳で、八十歳だと八十六歳で、それぞれ貯蓄が底を尽き生活が破綻する。ただし、何故か六十五歳

と七十五歳は共に破綻なしという結果になっている。

この記事を、どう見るか。

年収・退職金が試算条件よりも多い方々・多かつた方々は、まず破綻の心配は無いだろう。

子供が立派に成長し、いつまでも親を頼っているのだから、さらに破綻の心配は無用だろう。

問題は、普通よりも少し低い水準で現役世代を過ごししてきた、あるいは過剰にしている方々と、その子供世代である。

この国は、世界の知識人からは、世界一労働者に手厚い国と考えられてきた。サラリーマンとして一生を会社に捧げれば、黙々と働きさえしていれば、平穩な老後が迎えられる。人々はそう信じて、あるいは今でもそう確信して働いているのではないだろうか。ところが「現実」は、そう気楽なものではない」ということを示唆しているのかも知れない。

老後破綻を避けるために、定年後も働き続けることを選択する人々が増えている。

昨日まで年長者として敬意を籠められて呼ばれていた人物が、定年と云う制度上の区切りを経た翌日から、現役世代の三分の一程度の金額で、それほど重要でもない役務に従事させられている。プライドは、自分と妻の暮らしのために捨て去らなければ、生きていくことすら俛ならない状況。サラリーマンの平均的収入以下となる半数の人々は、この現実に向き合う。

一方で、定年後の就労者の増加は、若年世代の就労とバッティングして、若者の人生設計をより困難にする可能性もはらんでいる。定年世代の親と、遅く生まれて若年労働世代となっている子供を持つ家庭は、このダブルパンチの只中に放り込まれた人たちのなかかもしれない。

サラリーマンが就労形態の大多数を占めている時代は、実は日本の歴史の中でもそれほど長くは無い。信長の戦国時代や維新から戦前にかけてなど、商魂たくましくアジア各地で活躍した時代もあった。

筆者を含めて現代を生きる殆どのひとは、寡黙に勤勞する姿こそ美しいと教えられ、不勞所得・権利収入の話など耳にしたことが無いのが現実だろう。

ところが、諸外国ではリーダーとして生きることが求められる若者には、「人間の収入形態は労働収入と権利収入の二つしかない」ことをはじめ、両者の特長を教えられようという。

同時に、経済的に豊かな家庭ほど、「七つのポケット」と例えられるように、複数の収入源を持つことの重要性を教えられる。企業において、それほど強い単一商品・単一カテゴリーを持っていても、単一であるが故のリスクを嫌われると、株価が上がることは無い。

生活・人生に経済の影響が根深い今日、個人レベルでも複数の収入源・権利的収入を持つということの価値が見直される時代が訪れていると感じている。



民事再生手続を経て、当社は会社再建を果たした。よくもまあ、金繰りの一本綱を渡りきり、あれだけの借金棒引きを認めさせ、取引先からの信頼を取り戻し、厳しいリストラのなか業務継続に必要な社員を保てたものだと思う。それもこれも、白いフェラーリを始めとする資金の出し手の存在、最強の弁護士チームの導き、多大な損失を被った債権者の許容、若きファンドマネージャーの奮闘、逃げない新社長を中心とした新経営陣の結束、旧社員の理解と支援、そして何よりも社員の真摯な技術者魂の賜物である。

弁護士チームの一人、“飲み会では隙だらけ”の御曹司が、最初の出会ってから8年半が経過したこの5月に、SNSで少し隙をみせた。

「昨日今日で依頼者の趣旨に沿ってあちこちに高圧的な書面やメールを出しまくったので来週以降の反応を考えるとちょっと…。この仕事は、『どんな人とも仲良くしたい』『いい人に思われたい』という(仕事の)弱い気持ちとの戦いですね。」

当時、彼はいつも涼しい顔をしていたが、実のところはそういう気持ちがちょっとあったのかもしれない。私は期間限定で強い気持ちを押し通し、勝手な使命感で物事を淡々と進めたからこそクリアできたのだと思う。常に逃げない姿勢を求められる立場は実に厳しい。

会社存亡の危機に際し、自己都合で退職した社員も数多い。何を隠そう私自身、こういう立ち位置でなければ、沈没しそうな船から逃げることを真っ先に考える人間である。彼らは当社から逃げたことに違いはないが、それぞれの人生と向き合いそして違う道を選んだだけのことである<sup>1</sup>。

当事者として会社再建を果たしてから4年後、私はこの会社を自己都合で退職する。民事再生手続終結後、管理部門から現場へ戻ることを選んでみたものの、何かのハンドルを握っているかのようなゾクゾク感がなく、専門技術職として最も大切な、社会を支える裏方としての使命感に欠け、適当にこなすだけの仕事ぶりは周りに迷惑をかけるような状態であった。そのようななか、父が膵臓癌、母がリンパ腫といういずれも深刻な病魔に相次いで侵され、一人息子としてこのままでいいのかという気持ちがふつふつと湧いてきていた。

その頃私は幸運にも郷里に職を得て、その半年後に母、2年後に父を一番近くで見送ることができた。この会社を離れることに未練がなかったわけではない。新社長は、会社再建の当事者でありながら現場に戻りたいと言う私に、寿司屋のカウンター席で「管理部門に残らないか」という言葉を静かに置いたが、この時点でその先の別れを予見していたのかもしれない。私の頑固さを知っている新社長は、辞めるという決断を尊重してくれたが、送別会の挨拶では言葉の出ない新社長がいた。

居場所を欲しがりつつも、一つの場所で根を張り居座ることをよしとしない私。何かの当事者たらんとする思いは対象を変え、今も、そしてこれからも続いていく。(完)

1：その後の彼らについてはほとんど知らない。

最近朝から晩までお店に出る機会が多く、話題のもとになる情報を集める機会が少なくてネタ切れです。そこで今回は大変申し訳ありませんが、27年ぶりに野球をはじめたことを徒然なるままに書き記したいと思います。少し早いですが私目線での今シーズンの野球トピックスです。

#### <高校野球>

夏の話題といえば

・安樂君をはじめとした強豪校が地域予選で敗退。このあたりで清原、松井、松坂のような本当のスターではない事が伺えます。

・我が郷土の石川県星稜高校をはじめ北信越出身校の大躍進。温暖化も影響あるかのなあ。そして、一番の話題は軟式高校野球全国大会での中京対嵩徳延長50回の熱闘です。これが決勝なら両校優勝というのが概念もあったのでしょうか準決勝でしたから決着をつけなければいけなかったんですね。「ゆとり世代=競争が苦手」とは決して言えない熱戦でした!!

#### <MLB>

・田中マー君の衝撃的デビューと疲労蓄積による故障!?. 昨年の日本シリーズでの連投問題が再燃か!

・ダルビッシュが提言する中四日の弊害がメジャーに激震!?!しかし中六日にすると給与が減るという話も。

でも一番の話題は「メジャーでホームラン数激減」ですね。60本、70本を打っていたのはもう昔の話。今年のホームラン王はアリーグで40本、ナリーグで37本です。ヤンキースのAロッドをはじめとした薬物によって爆発的なパワーを得ていた時代の終焉とともに、過去の偉業と言われた成績を今後どう判断していくのかという点に興味がつきません。しかし松井秀喜が今全盛期の状態でメジャーに行っていたらと想像すると悔しくてなりません。

#### <プロ野球>

・空前のカーブブーム。カーブ女子なる流行も。日本一地味でお金がない球団が注目されるっていいですね。

でもFAでいい選手は皆出て行くんだろうな。

・気になる落合GMと谷繁監督の関係。本当に落合の傀儡政権なのか?来年は谷繁の逆襲がはじまる!!

・やっぱりすごいぞ大谷君。目指せ165キロ、20勝、30HR。そしてメジャーで最多勝と3冠王!!!まさに漫画の世界。

プロ野球のクライマックスシリーズ(以降「CS」)も終わり、日本シリーズに突入したのですが、在京の某金満球団(愛知の球団ファンなもので、ついこんなものの書き方になってしまいます。)はペナントレースを圧勝したにも関わらずCSでは一勝もできないという体たらくな始末。でも、こういう結果になるとやはり出てくるのが『じゃあペナントレースはなんだっただ』という類のものです。そんなのやる前から想像できている話にも関わらずです。私はペナントレースとCS・日本シリーズは別物と考えてます。一年間144試合のの苦楽をその球団のファンであるからこそ楽しみ、チャンピオンを決めるのがペナントレース。だからこそ2位、3位だと悔しいのです。そして例えCSに負けたとしてもその価値は変わりません。CS、日本シリーズは真のチャンピオンを決める戦いではないので、私は最後の祭りと思ってます。最後の最後まで野球が盛り上がりいいじゃない。という程度です。

そして、この10月から私野球をはじめました。ちゃんとするのは中学卒業以来なのですが、初戦は1HR、1エラーとまずまずの滑り出し。これから毎週土曜日は練習と試合の日々です。ちなみに草野球のシーズン終了は11月末です。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ロシアへの旅 2014.8.29~9.6  
静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

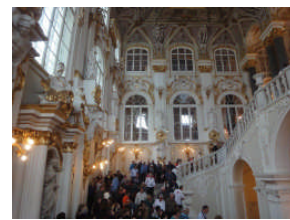
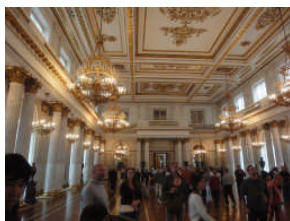
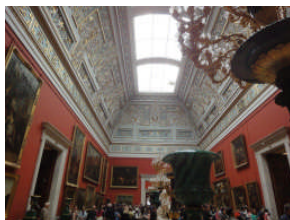
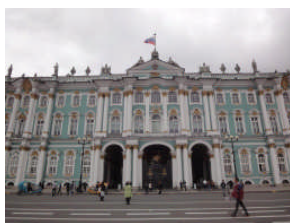
エルミタージュ美術館は、もともとは皇帝の宮殿だったもの。ピョートル大帝が冬を過ごす宮殿として1721年に建てられ、その後三つの建物が建てられ廊下で繋がっている。1837年に冬宮は大火で焼失したが修復された。エカテリーナ2世が1764年に美術品225点を購入したことを契機に収集が始まり保管陳列するための建設が次々に行われた。収蔵美術品数300万点、展示室を全て歩くと20キロメートルになると言う。

一日全てをエルミタージュ美術館で絵を見尽くす覚悟で来たが、11時見学開始、15時にダウン。美術館疲れを起こした。半地下にのみカフェ、トイレ、クロークがある、飲食物の持ち込みはできないので、見学を始めたら、ぶっ通しになる。

入館料は400ルーブル(約1200円)、長女は学生証見せてタダ、日本語対応の音声ガイド器をインフォメーションで借りて、いよいよ観覧スタート。とにかく、宮殿装飾が素晴らしい。眩いばかりの金色に色とりどりの大理石がふんだんに使われている。天井からはシャンデリア。このデザインと緻密な施工に圧倒される。

写真は撮りまくりだ。フラッシュを使わなければオケケだ。但し、デリケートな日本画や貴族が纏っていたドレスは撮影禁止だった。まずはイタリア美術からだ。ニコライ1世の書斎だった部屋がダ・ヴィンチの間、現存する絵画が14点しかないダ・ヴィンチの絵のうち2点がここにある。そしてラファエロの間に続く。見逃せない絵の前は大変な人だかりだが、多くは団体客なので過ぎ去った後にゆくりと観ることができる。東洋は俄然、中国人が多い。4時間の見学で日本人には数人しかお目にかからなかった。

ロシアは個人が国内を自由に移動することを歓迎していないようだ。ビザ取得の厄介さがそれを物語っている。このため予め旅程が決まっている団体旅行者が多い。



続くはルーベンス、レンブラントに代表されるオランダ美術だ。巨匠レンブラントの作品は20点を越していた。次はエル・グレコにベラスケス、ゴヤのスペインの大家が揃って現れてくる。その後によくルノワール、モネ、ゴッガン、ゴッホ、セザンヌと馴染みある作品が現れ、肩の力が抜けた。締めには掛け軸、浮世絵、兜に刀の日本の展示を観た。

この上ない贅沢な美術鑑賞であったが、いかんせん疲れた。日本の12月を思わせる外の空気に触れながら近くのベンチにへたりこんだ。

「地球の歩き方」のマップに目をやり周囲の目ぼしいところを探すこともなく、見渡せば像や塔が目に入ってくる。火を吹く二本の塔が気になった。ネヴァ川を往き来する舟が頼りにする灯台らしい。1810年に建てられた彫刻つきの灯台だ。翌日に見たら火が出ていなかった。ナイスタイミングだったかな。

この日の夕食はホテルそばにある家庭的雰囲気のあるレストラン“テプロ”に行った。店は伝統的町並みの中にあって目立たない。入り口からまずは中庭広場に入る。中庭で食事をしている人も多く、特に子連れが多い。ひっそりとした街路から想像できないほど中は賑わっていた。予約して来なかったが、タイミングよく一組のお客が出て行ったので我々のテーブルが出現したことは幸いだった。サラダ、スープ、メインと頼んだ料理はどれも美味しかった。

サンクトペテルブルクの二日目は、世界遺産になっているピョートル大帝の夏の宮殿“ペテルゴーフ”に足を延ばすことにした。エルミタージュ美術館前のネヴァ川の船着き場から高速船で30分、往復1100ルーブルがかかる。雲が垂れ込めた河口からフィンランド湾に出ての左90度方向の岸に向かった。

船を降りるとすぐにゲートがあり入園料450ルーブルを払い庭園内に入った。ピョートル大帝が北方戦争に勝利し、それを機に国威を内外に示す宮殿の普請に1714年着工、大帝が亡くなる2年前の1723年に完成した。第二次大戦でドイツ軍に破壊されたが、見事に修復されている。後に見たイサク聖堂も血の上の救世主教会も戦争時の大ダメージから復活している。巨額の財と時間、知恵をかけたものは永遠に受け継がれていく。国に留まらず世界の宝として、当時の芸術性、精神性が永遠に残されていくことが素晴らしい。

庭園内に入り真っ直ぐに運河沿いを歩いていくと大宮殿が見えてくる。宮殿手前の段々状にあるテラスに大滝と言う水の庭園があり、金色に輝く数々の銅像が置かれている。11時に突然音楽が流れ、大噴水ショーが始まった。す、凄すぎる！当時、ロシアの国威を見せつけるには充分だったであろう。大滝下の公園には150以上もの趣向を凝らした噴水がある。それらは“アダム”、“イヴ”、“ピラミッド”、“太陽”などと名付けられている。“いたずらの噴水”が面白い。ベンチに腰掛けると突然噴水、知らずに掛けた人は水浸しになるというものだ。(続く)